

インドネシア語における重複語の研究

— 重複語の意味と形態を中心に —

デデイ スリヤデイ

(2006年10月5日受理)

Research of Reduplicated Words in the Indonesian Language
— The focus of meaning and form of Reduplicated word —

Dedi Suryadi

This research considered about the reduplicated word in the Indonesian language. It is various that vocabulary composition smell and the shape of reduplicated does the meaning to the reduplicated word in an Indonesian language a lot. The form of the reduplicated word of an Indonesian language was roughly divided into two kinds roughly separately, namely that “Whole reduplicated word” and “Partial reduplicated word”. After that, two subordinate positions were classified into “Whole reduplicated word”, and the subordinate position was classified into five in “Partial reduplicated word”. The reduplicated word of Indonesia might add the affix to the reduplicated word, and be used. The reduplicated word of an Indonesian language is for the meaning. There is a great so on of the animal and the plant of, that shows the emphasis of the meanings, that show the plural and the amounts and that show the appearance or the resemblance.

Key words: reduplicated word, whole reduplicated word, partial reduplicated word

キーワード：重複語，全体重複語，部分重複語

1. はじめに

インドネシア語は日本語の畳語のような繰り返し
の単語が多いのが一つの特徴である。語彙に関する最も
大きな特徴は、接辞（接頭辞・接尾辞）や重複による
派生語が豊富に作られることである。jalan（道）を
語基とする派生語の例を以下に示す。

- a. jalan-jalan「道」（複数）
- b. berjalan「動く、進む」
- c. berjalan-jalan「散歩する」

例 a. と c. のような重複形態がインドネシア語には
よく見られる。日本語でもオノマトペの他に、言葉を
重ねて、重複形を取る表現が多い。「国々」「花々」の
ような同じ単語を重ねた、いわゆる「重複語」の語彙
形式の中に多く見られる。これらの語彙構造は辞書に
は登録されていないものが多く、外国人にとっては理

解しにくく、難しいものである。ここでは日本語の畳
語と対照する前段階として、筆者の母国語であるイン
ドネシア語における重複語の実態を明らかにしたい。

2. 研究動機と目的

本研究では日常生活でよく使用される語彙の中
から、インドネシア語における重複語の例を集め、重複
形式とその用法を考察し、分類して整理する。具体的
には、インドネシア語における重複という造語の仕方
に規則があるか、あるならば、その規則はどのような
ものかについて検討し、インドネシア語における重複
語の特徴を明らかにしていく。

この研究成果は、インドネシア語を学習する日本人
やインドネシア母語話者の日本語教育に携わっている
人にとって、理解や指導の参考になることが期待される。

3. 研究方法

まず、インドネシア語における先行研究を概説し、本研究の問題点を明らかにする。次にインドネシア語の重複語を収集する。『Kamus Besar Bahasa Indonesia (KBBI)』と『Kamus Umum Bahasa Indonesia (KUBI)』に収録されている語彙を中心に収集するが、インドネシア語の重複語も辞典に記載されていないものが多い。そこで、その他の出版物や online 新聞や雑誌などに掲載されているものからも、それらを抜き出し調査対象に含めることとする。上記の資料を形態と意味の観点から分類し、最後にインドネシア語の重複語の派生規則の特質を究明する。

4. 重複語とは何か

インドネシア語では、語根から派生した表現をする際に、語根あるいは接辞を付帯させた派生形を繰り返すものがある。その中で、重複語と呼ばれるものがある。

重複語とは、同じ意味の語を2回以上繰り返すことによって、その語の持つ意味を強める働きをする語である。インドネシア語では語根から発生した表現をする際に、語根あるいは接辞法を付加させた派生形を繰り返す、重複と呼ばれる表現を使う。すなわち、インドネシア語にも日本語と同じように、同じ単語や語根を2度繰り返し、重複語あるいは疊語として使われるものがよくあるのである。インドネシア語では「疊語」のことを「kata ulang」または「reduplikasi」という。

インドネシア語大辞典『Kamus Besar Bahasa Indonesia KBBI』(2005)には、「kata ulang」とは「pengulangan kata keseluruhan atau sebagian」と解釈されている。翻訳すると、「単語の繰り返し、全体的または部分的」ということになる。また、Abdul Chaer (1994: 182)によると「Reduplikasi adalah proses morfemis yang mengulang bentuk dasar, baik secara keseluruhan, secara sebagian (parsial), maupun dengan perubahan bunyi (重複語は重ねることばまたは繰り返しは語根または形態素を全体あるいは一部繰り返し、音韻変化などの重ねることによって作られた語である)」と定義されている。

このように、基本的にはインドネシア語においても重複による語彙構成があることが分かる。しかしながら、インドネシア語における重複語はその作られ方や用いられ方に日本語における重複語と多くの相違点が見られる。そこで先行研究を参考にしながら、インドネシア語における重複語の形式や意味について詳細に見ていきたい。

4.1. インドネシア語の重複形態の先行研究

インドネシア語 (Bahasa Indonesia) は、インドネシア共和国の国語である。この地域の交易語(リンガ・フランカ)であったマレー語の一方言を、国家の共通語としたものである。マレーシアのマレー語と非常によく似ており、互に通じ合うばかりでなく、現在では正書法もマレーシア語と共通している。形態論上では日本語と同じく膠着語に分類される。オーストロネシア語族に属する。

基本的に、語順はS-V-Oであるが、日本語のように主語が省略されることがある。修飾語は、被修飾語のあとに付く。例えば「orang hutan」は日本でもよく知られたインドネシア語だが、「orang」は「人」、「hutan」は「森」であるから、「orang hutan」は「森の人」という意味である。ただし、数を表す語および時の経過を示す語は前に付く。例えば dua jam は、dua が2で jam が時なので「2×時」すなわち「2時間」である(この2を「基数」という)。jam kedua だと「第2の時」で「2時」の意味になる(この第2を「序数」という)。

重複法はオーストロネシア語族、特にインドネシア語やマレー語の諸言語に共通した特徴である。インドネシア語においても重複形式が一つの特徴である。

Abdul Chaer (1994: 183)によると、ジャワ語やスンダ語の影響によりインドネシア語の重複形にはいろいろな形態があり、以下の5つに分類できる。

1) Dwilingga (全体重複語)

；Pengulangan morfem dasar (語根あるいは形態素が2回繰り返され、成立した重複語)

例：meja (机) → meja-meja (机机)
murid (学生) → murid-murid (学生達)
duduk (座る) → duduk-duduk (ナンパする)

2) Dwilingga Salin Suara (相互重複語)

；Pengulangan morfem dasar dengan perubahan vocal dan fonem, (繰り返された語に音声的(母音や子音)対応が行われる)

例えば、母音変化 bolak-balik (揺れ動く)には母音は/o/から/a/へ、/a/から/i/という変換が見られる。

例：warna-warni (いろいろな色)
mondar-mandir (行ったり、来たり)

3) Dwipurwa (部分疊語2)

；Pengulangan silabel pertama (語根あるいは形態素の一部を繰り返した疊語)

例えば lelaki (男)には語根が[laki]で、語頭子音/l/に母音/e/を付加して[le] + [laki]で重複語[llelaki]になる。

- 4) Dwiwasana (部分畳語2)
 : Pengulangan di akhir kata (語根あるいは形態の語尾を繰り返した畳語)
 例: cengengesan (笑う)
- 5) Trilingga (3回以上の反復型)
 : Pengulangan morfem dasar sampai dua kali (2回以上語根を繰り返した語)
 例: dag-dig-dug (ドキドキする)
 ngak-ngik-nguk (泣き声)

また, J. D. Parera (1994: 46-61) は, インドネシア語の重複語の形態について以下のように述べている。「全体重複形式」: bentuk ulang yang terjadi dari bentuk dasar yang di ulang seutuhnya (語根あるいは形態素がそのまま全体を繰り返した重複語形式)

- 名詞の例: rak-rak (棚棚)
 tong-tong (箱箱)
 pemuda-pemuda (青年青年)
 peraturan-peraturan (規則規則)
- 動詞の例: main-main (遊び遊び)
 lari-lari (走る走る)
 duduk-duduk (座る座る)
 makan-makan (食べる食べる)
 kira-kira (思う思う)
- 形容詞の例: baik-baik (良い良い)
 cepat-cepat (早い早い)
 sehat-sehat (元気元気)

以上の Abdul Chaer (1994) と J. D. Parera (1994) のインドネシア語の重複語の形式の分類には不足点やあまいな個所が幾つかある。例えば、「接辞重複語」や「仮定重複語」についての分類は, インドネシア語の重複語の形態や意味に関して, 現在でもインドネシア語の言語学者の間で議論が続いている。日本語の「人々」とか「木々」と同様に普通名詞の場合は複数の意味を表す。例えばインドネシア語の「orang」の重複語「orang orang」は「人々」である。インドネシア語では抽象名詞の重畳語も多く用いられる。その場合はもとの語の意味と関連のある熟語になる。また, インドネシア人の話にしばしば登場する「kira kira」の場合, 「kira」一語の単独の意味は「計算」である。「kira-kira」と計算が二乗〔計算×計算〕されると「清算」または「精算」のような意味になると数推されよう。しかしインドネシアでは計算の二乗の「kira-kira」は「概算」か「約」の意味になる。

インドネシア語は, 接辞(接頭辞や接尾辞など)を「語幹」(接辞が付く前の語形)に付加して「派生語」を作ることにより大きな特徴がある。「語幹」には「基語」(辞書の見出し語にはほぼ相当する, 基本語形)となる

場合が多いのであるが, 「派生語」にさらに接辞が付く場合も非常に多い。その一つは重複複合動詞というもので, 重複語が複合語の一つの構成要素となっている複合動詞である。インドネシア語の重複の機能は, 語によって複数以外の意味に使われている。例えば, berjalan jalan は ber + jalan -jalan 「ぶらぶら歩く」の意味で重複複合動詞である。

そのほかに, tolong-menolong 「助け合う」, pukul-memukul 「殴り合う」などもあり, 規則は複雑であると言える。

5. インドネシア語の重複形の形態に関する考察結果

5.1. インドネシア語重複形態の分類

Abdul Chaer (1994) の分析方法を踏まえ, 収集した資料から抜き出し, 整理した。インドネシア語における重複語の形態は語根の母音や子音を繰り返すものが多いから, ここで, その観点から重複語の分類をした。

Abdul Chaer (1994) は, 重複語を「全体重複語」, 「交互重複語」, 「部分重複語」, 「押入重複語」と「接辞重複語」と5つに分類しているが, ここでは, まず, 「全体重複語」と「部分重複語」の2種類に大別した。その後, 「全体重複語」には2つの下位分類を, 「部分重複語」には5つの下位分類を設定した。

1) 全体重複語 (kata ulang penuh)

語根全体を繰り返して重複結合し, 文中で一語として働いているものを「全体重複語」という。この「全体重複語」を「全体反腹型」と「接辞付加型」の2つに下位分類した。以下で例を挙げながら, 示していく。

1.1) 全体反復型

同一の単語や語根を全体的に2回繰り返し, 一語としたものである。

- 例: a. murid-murid (学生達)
 b. buku-buku (たくさんの本)
 c. gula-gula (飴)
 d. undang-undang (法律)
 e. jalan-jalan (散歩する)
 f. main-main (遊び)
 g. cantik-cantik (きれい)
 h. pagi-pagi (早朝)
 i. curi-curi (こっそり)
 j. satu-satu (一つ一つ)

1.2) 接辞付加型

インドネシア語には接辞を付加することによって, 成立する語が多く見られる。重複語にもこのような語

形はしばしば見られる。「接辞付加型」とは接辞が語根全体を繰り返された重複語に付加することによって成立するものである。接辞とは非自立的な形態素を指し、接頭辞、接尾辞と共通辞と3つに分類される。インドネシア語の重複語では分類ごとに決められた接辞しか使われない。

- i) 接頭辞 (awalan) :ber-, ter-, me-, se-, ke-
- ii) 接尾辞 (akhiran) : - an
- iii) 共通辞 (sisipan) : (ber…an), (me…i), (me…kan), (se…nya), (ke…an)

- 例: a. (ber)-lari-lari (走る)
 b. (ter)-senyum-senyum (笑う)
 c. (me)-nyannyi-nyanyi (歌う)
 d. (se)-pandai-pandai (いくら上手でも)
 e. (ke)-dua-dua (二つ共)
 f. buah-buah-(an) (いろいろな果物)
 g. (ber)-kejar-kejaran-(an) (追いかける)
 h. (hormat-(meng)-hormat-(i) (尊敬し合う)
 i. (me)-nanti-nanti-(kan) (ずっと待っている)
 j. (se)-bisa-bisa-(nya) (できるだけ)
 h. (ke)-merah-merah-(an) (赤っぼい)

接辞の使い方について、以下に、例を挙げながら、説明する。

- 例: pandai (賢い)
- a. Ali, orangnya pandai
アリさんは賢い人です。
 - b. Adik-adiknya pandai-pandai juga
彼の兄弟は、皆とても賢いです。
 - c. (se)-pandai-pandai tupai melompat.akhirnya jatuh juga. リスはいくら上手に飛ぶことができても、たまに落ちる事もある。

2) 部分重複語 (kata ulang parsial/sebagian)

語根を部分的に繰り返し、音声適応を行って、重複形態になるものを「部分重複語」という。「部分重複語」は以下のように5つに再分類できる。「交互変化型」, 「音節反復型」, 「母音反復型」, 「母音付加反復型」と「押入反復型」である。例を挙げながら、示していく。

2.1) 交互反復型

「交互反復型」には母音変形と子音変形がある。インドネシア語の重複語においては母音変換も子音変換も多く見られるが、中でも特に母音の変換が多い。

2.1.1) 母音変形 (pengulangan dengan perubahan vocal)

母音の変換は /u/ と /a/、/a/ と /u/、/a/ と /i/、/o/ と /a/、/a/ と /e/ の母音間において行われ、一定の規則を持ち、微妙なニュアンスの違いを表す。

- 例: a. bolak-balik (揺れ動く)
 b. desas-desus (噂)

- c. kumat-kamit (つぶやく)
- d. mondar-mandir (いったりきたりする)
- e. serba-serbi (いろいろなもの)
- f. warna-warni (色彩富んだ)

例eに挙げた「serba-serbi」の語根は[serba]である。母音 /a/ から /i/ に変わり、[serbi] になっている。重複語になった「serba-serbi」は「いろいろなもの」という意味を表す。

2.1.2) 子音変形 (pengulangan dengan perubahan konsonan)

子音の交代は、語頭音において行われる。

- 例: a. cerai-berai (つぶれた)
 b. hingar-bingar (うるさい)
 c. hina-dina (悔しい)
 d. carut-marut (ばかげたこと)
 e. lauk-pauk (いろいろなおやつ)
 f. sayur-mayur (各種類の野菜)
 g. ramah-tamah (友好的な)

以上の例を見ると、子音変換は語頭音素の子音において行われることが分かる。例 a. の [cerai-berai] には、子音 /c/ を /b/ に変えるが、[erai] には変換がされていない。

2.2) 音節反復型

「音節反復型」には、「前音節反復型」と「後音節反復型」がある。

2.2.1) 前音節反復型

- 例: a. gerak-gerak (行動)
 b. kilat-kilau (ピカピカ光る)
 c. remuk-redam (バラバラになった)
 d. batu-batuan (いろいろな石)

前音節反復では、前の部分だけ重複させる。例 d の [batu-batuan] では [ba] が繰り返して使われている。

2.2.2) 後音節反復

- 例: a. hiruk-pikuk (騒がしい音)
 b. kacau-balau (混乱した)
 c. segar-bugar (さわやか)
 d. terang-benderang (光であふれて明るい)

後音節反復は、前音節反復と反対で、後音節の部分反復される。例 a. の [hiruk-pikuk] では、後音節の [uk] が繰り返されている。

2.3) 子音反復型

「子音反復型」の数は少ない。語頭子音が繰り返されて、反復される。

- 例: a. gerak-gerak (行動)
 b. serba-serbi (いろいろな)
 c. warna-warni (色彩富んだ)

[gerak-gerak] では、/g r k/ の反復である。

2.4) 母音添加反復型

「母音添加反復型」とは、語頭に立つ子音を反復し、母音 /e/ を語根に添加することによって、成り立つ重複語である。例 b の語根は [tamu] の語頭子音 /t/ をまず反復する。その後、母音の /e/ を付け加えた後、語根に添加して、[te]+[tamu] の形で、重複語の [tetamu] になる。

- 例：a. laki → lelaki 「男」
 b. tamu → tetamu 「お客さん」
 c. tangga → tetangga 「近所の人」

2.5) 挿入反復型

「挿入反復型」の語頭子音の後には、2つ目のアルファベット挿入詞 /em/ を挿入し、語根「~/em/～」という形を成立させる。

- 例：a. guruh → guruh-gemuruh (雷のような音)
 b. jari → jari-jemari (複数の指)
 c. tali → tali-temali (綱)

「挿入反復型」の重複語は、現代ではあまり見られないが、俳句や詩などではよく見られる。ほとんどの複数の意味を持ち、その数も限られている。これはインドネシア語の重複語における特質の一つである。

重複語は、インドネシア言語学において、基本形をすべて反復する完全重複と、一部の音節・音素のみを重ねる部分重複とに分けられ、ともに接辞の一種と見なされている。

5.2 インドネシア語の重複語の意味分類

インドネシア語では、「重複形」がよく用いられ、「強調」「複数」など、いろいろな意味・機能を表す。例えば、banyak-banyak「大変多い」は banyak「多い」より意味が強くなる。インドネシア語の名詞には「単数」と「複数」による語形変化はないので、文脈で判断する。単語を重ねる際に、語形を変化させると、何々の種類という意味になる。このほか、単独では特別の意味を持たず、重ねると意味を持つものもある。インドネシア語の重複語の意味については Abdulchaer (1994), Parera (1994), インドネシア語大辞典『Kamus Besar Bahasa Indonesia KBBI』(2005) の指摘を参考にしながら、以下のように意味分類した。

1) 主に複数や数量の多さを表す。しかし、単に数量的な意味を表すだけでなく、その中には、種類の多様性という意味も含まれている。例えば、[buku]「本」である。一般的には、[buku] は一冊の「本」という意味を表すが、重複語になると、複数の意味が含まれる。[buku-buku] は、単に数量的意味だけを持つのではなく、いろいろ種類の「本」、すなわち、内容的には異なる個々の「本」という意味も含まれている。

- 例：a. murid-murid (たくさんの本)
 b. negara-negara (国々)
 c. rumah-rumah (家々)
 d. lauk-pauk (いろいろなおやつ)
 e. buah-buah (an) (いろいろな野菜)
 f. faktor-faktor (いくつかの要因)

2) 意味を強めたり、深めたりする。または度合いの大きいことを表す。例えば、「とても」、「非常に」、「すごく」、「極めて」という意味を示す。

3) 植物、動物、昆虫を表す。

重複語 [kupu-kupu] は「蝶々」という昆虫の名前を意味をする。語根 [kupu] 一つの場合では意味がなく、使われない。[kupu-kupu] のように、繰り返されはじめて意味を成す。このような昆虫は、普通、群れをなし活動し、その数が多い。そのため、一匹の場合でも、たくさんいる場合でも、それぞれ重複語の形にして使われている。

- 3.1) 昆虫：a. anai-anai (白蟻)
 b. kunang-kunang (虫)
 c. jentik-jentik (ボウフラ)
 d. kupu-kupu (蝶々)
 e. laba-laba (蜘蛛)
 f. rama-rama (蝶々)

- 3.2) 動物：a. biri-biri (羊)
 b. kura-kura (亀)
 c. lumba-lumba (イルカ)

- 3.3) 植物：a. hujan-hujan (enterolabium saman)
 b. kisi-kisi (gendarussa vulgaris)
 c. kaso-kaso (gendarussa vulgaris)
 d. malu-malu (mimosa pudica)

4) 様子、類似(メタファ)を表す。また、「…の傾向が強い」ことを表す。

- 例：a. ke-barat-barat-an (西洋っぽい)
 b. ke-merah-merah-an (あっかばい)
 c. ke-malu-malu-an (恥ずかしいがる)
 d. kacau-balau (混乱した)

5) まじめさ、積極的な態度を表す。

- 例：a. habis-habis-an (精一杯)
 b. mati-mati-an (一所懸命)
 c. ter-gila-gila (熱中する)
 d. me-ronta-ronta (もがく)
 e. se-bisa-bisa-nya (できるだけ)

6) 文型「いくら……でも」の意味を表す。

- 例：a. se-jahat-jahat (いくら悪くても)
 b. se-pandai-pandai (いくら上手でも)
 c. se-pahit-pahit (いくら苦くても)
 d. se-panjang-panjang (いくら長くても)

e. se-tinggi-tinggi (いくら高くても)

このように、インドネシア語の重複語の意味・機能について分類すると、以上の6つに分けられる。インドネシア語では、複数の示し方として、かなり一般的に重複形を使うことができ、それは名詞だけでなく、ほかの品詞においても、重複語を新しく作るができる。

また、「全体重複語」には、語根全体を2回繰り返し、複数を表すだけでなく、もう一つの意味を表すものもある。以下のものがそれである。

- 例1 : a. anak (子供) → anak-anak (子供達)
 b. jari (指) → jari-jari (複数の指)
 c. kuda (馬) → kuda-kuda (たくさんの馬)
 d. kunci (鍵) → kunci-kunci (複数の鍵)
 e. orang (人) → orang-orang (人々)
 f. jalan (道) → jalan-jalan (たくさんの道)

- 例2 : a. anak (子供) → anak-anak (人形)
 b. hati (心) → hati-hati (気をつける)
 c. gula (砂糖) → gula-gula (飴)
 d. kira (思う) → kira-kira (ぐらい)
 e. mata (目) → mata-mata (スパイ)
 f. orang (人) → orang-orang (案山子)

例2の重複語は例1の場合と異なり、単語や語根と違った意味を表すが、その重複語と語根の間には意味的な関連性があり、類似したものを表している。

具体的には、例a.の「anak-anak」では「人形」は人間の形をするという観点で「子供」と関連性があり、例c.の「gula-gula」では「飴」は甘いものつまり、砂糖と関連性がある。

インドネシア語における重複語は、ほぼすべての品詞においてよく見られるものであり、文章にもよく現れる語彙構成の一つである。インドネシア語では、「kata tugas」(機能語)でも、重複語が多く見られる。例えば、「jangan-jangan (もしかして)」、「kalau-kalau (もしも)」、「mana-mana (どこも)」などである。インドネシア語における重複語の使用頻度はかなり高く、会話で使用されるだけでなく、出版物や新聞など、書きことばにおいてもよく使用されている。

まとめると、インドネシア語の重複語の意味・機能は i) 様子あるいは類似、ii) 複数や数量、iii) 意味の強調、iv) 動物や植物の名前などを表す。また、語根の意味と「全体重複語」の意味の面での関連について考察すると、次のことが解明された。i) 2つの異なる意味を持った重複語があること、ii) 重複語とその語根の間には、何らかの意味的関連性があること、iii) 語根と違った意味を表す重複語もあること、iv) 語根は一語として成立しないものでも、重複語の形として用いられる場合があること。

6. 終わりに

重複語とは、同一の単語または語根を繰り返し、文中で一語として働いている語と定義される。インドネシア語の重複語の語彙構成においても、重複の形態は多く、その意味・機能も様々である。本研究ではインドネシア語の重複語の形態と意味を分析し、考察してきた。インドネシア語における重複語の特質は、以下のようにまとめられる。

- 1) インドネシア語の重複語は、変化のパターンが多様で複雑である。「全体重複語」と「部分重複語」の2種類に大別された。「全体重複語」は2つの下位分類が、「部分重複語」は5つの下位分類が設定された。
- 2) 重複語に、さらに接辞が追加されることがある。
- 3) 「全体重複語」では次々と新語を作ることができるし、その範囲が広く、自由に作ることができる。
- 4) 意味に関しては、様子あるいは類似、複数や数量、意味の強調、動物や植物の名前などを表すように多岐にわたる。

7. 今後の課題

これまでインドネシア語の重複語の研究は、その意味の究明を中心に研究されてきた。本研究では意味だけでなく、形式についても検討し、それらの下位分類を提示した。今後の課題として、インドネシア語における重複語と日本語における重複語について比較対照し、両言語における重複語の共通点や相違点について検討する必要がある。また、本研究ではインドネシア語における重複語の語彙の問題を取り上げたが、重複形は文や句においても見られるものである。今後は、そのような単位も扱っていく必要がある。

【参考文献】

- 中村真紀 (1998) 『インドネシア語の重複について』 卒業論文 (東京外国語大学)
 田村秦男 (1991) 「現代日本語における疊語について - 数概念からみた疊語 -」
 Balai Pustaka (2005) 『Kamus Besar Bahasa Indonesia』 Departemen Pendidikan Nasional
 Abdul Chaer (1994) 『Linguistik Umum』 Rineka Cipta Jakarta
 Jos Daniel Parera (1994) 『Morfologi Bahasa』 Gramedia Pustaka Utama
 牛江清名 (1975) 『インドネシア語の入門』 白水社

インドネシア語における重複語の研究 — 重複語の意味と形態を中心に —

ドミニクス・バタオネ, 近藤由美著 (1989) 『バタオ
ネにおまかせバタオネのインドネシア語講座』 めこ
ん
高井京一著 (1994) 『辞書なしで学べるインドネシア

語の最初歩』 三修社
高殿良博著 (1996) 『初めて学ぶインドネシア語』 語
研

(主任指導教員 町 博光)

